

日本民家園だより

第48号

平成14年1月31日

編集・発行 川崎市立日本民家園



山田家住宅の雪囲い

古民家の冬支度

～雪囲い展示～

日本民家園では毎年11月下旬から3月中旬にかけて、山田家住宅と菅原家住宅において「雪囲い展示」を行っています。今年度も平成13年11月24・25日に、日本民家園年中行事調査団の協力により作業を行いました。

【雪囲いとは…】

雪囲い展示を行っている山田家住宅と菅原家住宅は、前者が富山県五箇山地方、後者が山形県東田川郡朝日村といずれも有数の豪雪地帯に所在していました。どちらの地域も年によっては4m前後の積雪があるといわれています。そのため雪の降る11月頃から翌年3月頃まで、家屋敷が雪の被害を受けないよう、また寒さを防ぐよう、家の周囲に丸太や竹を支えに茅の束を巡らせ囲いを作りました。山田家住宅の場合は、周囲に巡らす茅束の上部を少し開けて明かり取りとし、入口にはオダレという茅すだれを立て掛けます。菅原家住宅の場合は、屋根まで茅束で塞ぎ、明かり取りはありませんでした。同じ豪雪地帯でも、雪囲いの方法に違いがあり、地域の特徴が見られます。

博物館（学芸員）実習

平成13年度は、博物館（学芸員）実習を5月から11月までに7回実施しました。本博物館で学んでいった学生は、30大学57名になります。1回の実習は10日間で、内容は職員による講義（日本民家園の概要説明、運営関係、学芸員関係など）や展示活動、資料整理活動、講座・事業運営、博物館ボランティア活動への参加など多岐にわたっています。いずれも実体験を重視し、学芸員の立場で博物館を見て、自分なりに考えていってもらおうことを目指したカリキュラムを組んでいます。

《博物館実習生の感想》

初日に民家園で感じたイメージは“別世界”であったが、今では“懐かしい”というイメージにかわっている事を最終日の今日気がついた。10日間の実習で知らない道は毎日通る道となり、すっかり景色にも慣れた気がする。

この実習では学芸活動・体験学習・講義と主に3つの活動を行った。どれも印象的で様々な事を学んだ。その中で一番緊張し、思い出に残っているのは小学生を対象に行った教育普及活動である。昔の人の仕事を体験している生徒達の口は輝き、私の解説にもとても興味を示してくれた。文化を保存し、伝承しようという動きが重要視される中、純粋に“昔の人はすごい”と感心する子供の姿はとても新鮮で印象的だった。

この実習で学んだ様々な知識は、今後民家を訪れる際や日常生活でも役に立ちそうな事ばかりである。貴重な文化財に囲まれて過ごした10日間の実習は、いつまでも忘れられない思い出となった。



年中行事展示替え作業中の実習生

【新移築・復原建物紹介】

旧小泉家外便所

(旧所在地 川崎市宮前区野川)

市内宮前区野川に所在する小泉家は、江戸後期のものと考えられる主屋を中心に東側に納屋、南側に土蔵、主屋前にとられた前庭と、かつての農家の屋敷構えを今に良く伝える遺構でした。

この納屋に隣接して、昔の農家ではよく見られた外便所が残されていました。平成13年1月に所有者の小泉家から住居を新築する旨の連絡がありました。日本民家園としては小泉家がかつての市内農家の様相を伝える貴重な遺構であることから、主屋を含めて保存できないかを検討しましたが、小泉家の意向やその他の諸情勢から保存は困難であるという結論になりました。そこでせめて外便所だけでも残したいと所有者にお願いをし本博物館に寄贈されることになりました。

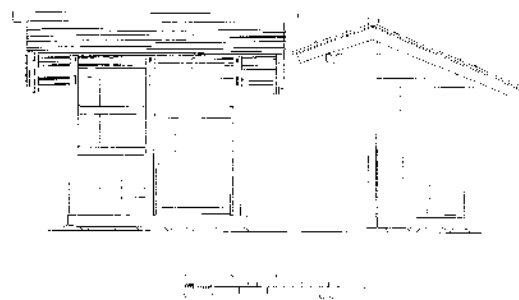
規模は梁間3.2尺(0.97m)、桁行6尺(1.82m)となり、正面左側に小便所、右側に大便所を備えた標準的なものといえます。建築年代については記録がなく、所有者からの聞き取りから大正から昭和初年頃と推定しました。また後世に修理が行われていることが移築の際に分かり、その内容・時期については屋根葺材のトタン板と、使用されていた便器を調査した結果、おそらく昭和40年代後半頃に屋根葺材のトタン板の取り替えと、便器の取り替えを含む床廻りの修理が行われたものと考えられます。

移築に際して、周囲の環境に合わせるため数ヵ所の整備を行いました。まず、屋根葺材をトタン板から杉皮に改め、棟も箱棟トタン板覆いから丸太押さえとし、屋根下地の野地小舞の量を増やし、その上にさらに野地板を設けました。基礎のコンクリート立ち上がり部分は相応しくないので柱位置に礎石を据え、小便側手前部分にも土台を廻し足元を固めました。しかし、小便側隅柱のホゾの関係で土台の角の方向が正式な納まりにはできなくなりました。また、土台については杉材から桧材に材種を変更しました。コンクリート基礎を行わなかったので高さが低くなり、基礎の背面に設けられていた汲み取り口も背面地表部に移設しました。さらに、大便側の扉ではステンレス製の蝶番金物^{ちょうばん}を肘壺金物^{ひじかめ}に変更しました。

移築場所については、これが市内の建物であることから市内登戸にあった旧清宮家住宅敷地内の農具小屋横に決定しました。工事は9月下旬から始まり、10月初旬に工事は完了しました。



旧小泉家外便所(移築後)とその構造



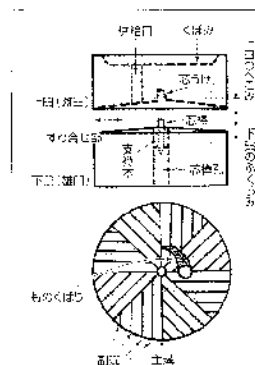
この外便所の移築により、主屋である旧清宮家住宅、納屋に見立てている農具小屋、狭くわずかな前庭と共に、昔ながらの農家の屋敷構えを実感してもらえればと考えています。



小泉家主屋(解体前)

～石臼 (いしうす)～

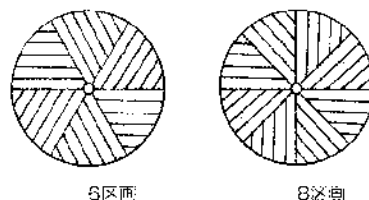
石臼の起源は、紀元前7世紀頃の中央アジアと考えられています。この石臼が日本列島に伝えられたのは推古天皇18年（610）とされ、「高麗王僧二人を献じ、名を曇徴、はじめて碾磑（トウシツ）を造る」という記事が日本書紀に載っています。この中の「碾磑（トウシツ）」が石臼のことです。しかし、その後石臼はほとんど普及せず、長い間奈良の大きな寺などでのみ使われていたようです。石臼が一般の人々に広く使われるようになるのは、江戸時代中期以降（18世紀以降）でした。



図版 1 石臼の説明

一般的に石臼は上臼と下臼を重ね合わせ、上臼を手動で反時計方向（左回し）に回転させて穀物などを粉にする道具です。上下の臼面には特有の刻み（目）が彫ってあって、その上下の刻みが交差することで穀物は中心から外側へ、次第に細かくなりながら排出される仕組みになっています。穀物を入れる供給口は中心から離れた場所にあって、上臼と下臼の間に物が入るとそれらをうまく広げる役割をする半月状の彫り（ものくぼり）があります。下臼面は原則としてほぼ平坦にしますが、上臼面は中央部を窪ませます。それをフクミ（含み）といって、最大間隔を原則挽く粒と同じにします。臼面の刻みは6区画と8区画が大部分で、関東地方以北と九州地方が6区画、東海地方から四国地方までが8区画が

口の断面形は逆三角形で、その形状は職人（白師）によって差がありましたが、実際に粉にする作用にはあまり影響しませんでした。重要なのは白面の周辺部数cmを完全な接触面にする⁴¹ことで、この部分の良し悪しが粉の均一性を左右しました。このため接触部の粗さを調整する必要があり、そのためには実際に石臼を挽きながら作業を行わなければならないので、白師自身の力量が問われる作業でした。石臼を手で回すための挽手の取り付けは、多くの場合直接上臼の横から打ち込む形式でした。関東地方の東京周辺では竹籬で穴の空いた木を締め付け、これに挽木を差し込む方法が多く用いられました。



図版 1 石臼の臼面の種類

こうして人々に広く使われていた石臼ですが、ものを粉にするという目的以外に、民俗儀礼や民間信仰などという信仰の対象としても非常に重要な役割を果たしていました。全国的に共通しているのは、石臼は神霊の降りてくる場所、あるいは帰っていく場所であるというものでした。例えば全国の広い地域で、「新築の家にはまず最初に臼（石臼）を入れる」、「家が火災に遭った時にはまず石臼から持ち出す」などが言い伝えられています。その他にも、安産祈願や吉凶占いなどとして石臼を使う地域もあり、様々な信仰の形が全国各地で伝えられています。しかし、一般の家庭で石臼が使われなくなったのと軌を同じくして、このような信仰もほとんど失われてしまったのが現状です。

日本民家園には数多くの石臼があり、それぞれが長い歴史を刻んだ趣きを見せています。民家園の各所に展示されている石臼をご覧になりつつ、かつての人々の生活の息吹を感じ、過去へと思いをはせてみてもらえればと思います。(学芸員 栗山一生)